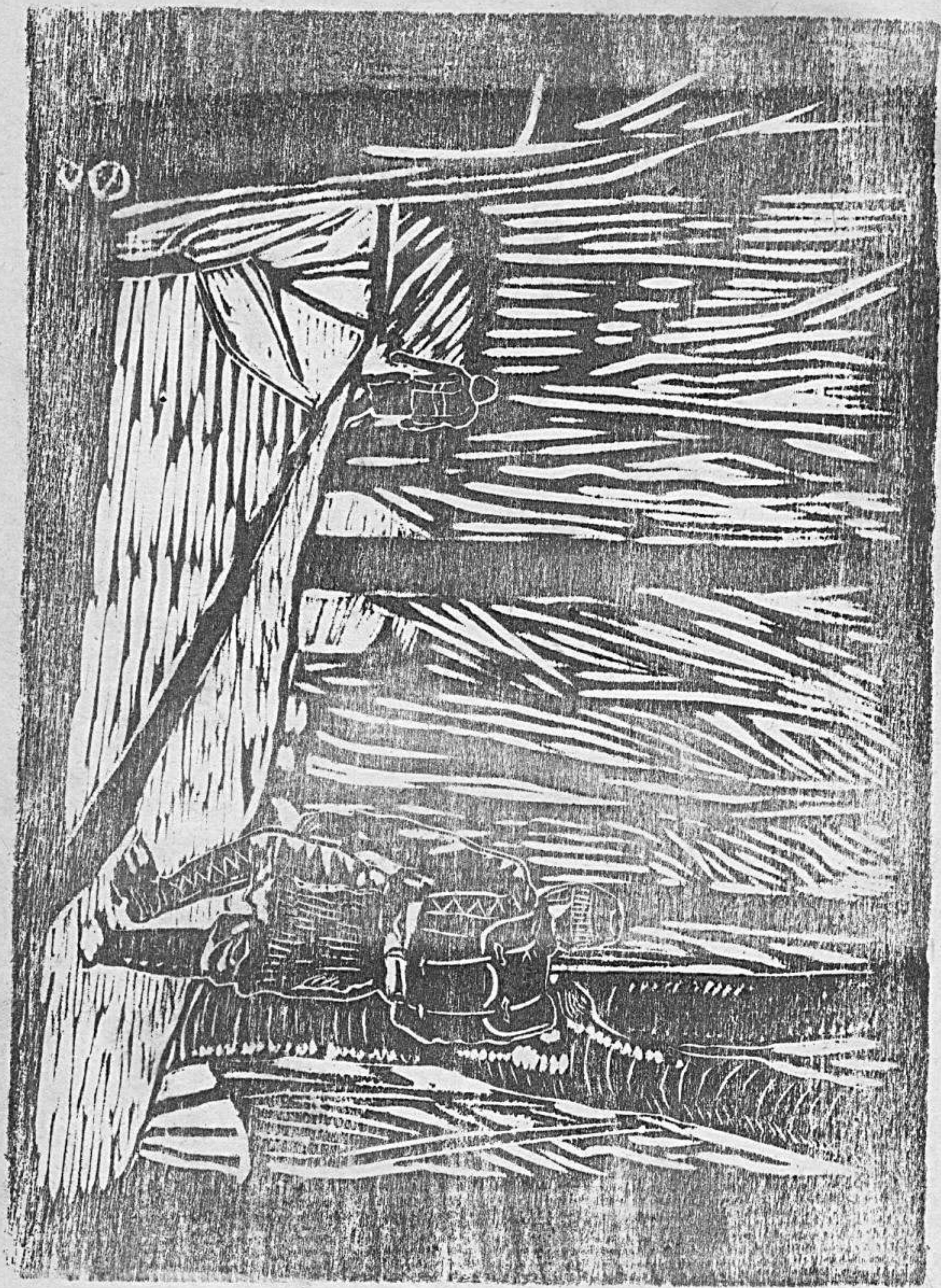


幽

及

第九拾四号



○私の特選コース

1

○雑感

杉山秀司 35

○ニつの山

吉田典子 9

○光の君

吉田典子 37

○はじめの山

○山の雑感

吉岡節子 39

「ハッ岳」

井出貞晴 11

○巻枝山行紀

宮代信子 41

○山との出合

奇養隆子 13

○ハプニング山行

横山勝利 43

○山との出合

山田 譲 14

○ある山行

渡辺 颯代 48

○

又より 16

○立山・雪上の晩餐

阿部早苗 49

○キスリング山行の

足跡 山田 進 17

○「ニペ」

鈴木国え 52

○屋久島旅行紀

渡辺 三世子 20

○俺はピエロ

山田 譲 56

○オの登山

加藤 潔 25

○今日・この頃

久保田 泣 58

○日本脱出の思い出

脇三英子 26

○統一つの道

石川一男 61

○近事片片

石川信子 70

秋の
特選
コース



○守達太良山へ東北・福島県へ

ハコース

二本木駅……塩天温泉……湯の川溪谷入口……

三階滝……八橋滝……くろがね小滝……守

達太良山……鉄山……沼の平……蔵葉越山

……白糸の滝……沼尻温泉……猪苗代駅

へ時期

※シヤクナゲの咲りてゐる時

※秋

へみどころ

紅葉に色づく溪谷美を眺めろ。

全般的に秋の紅葉の時期が一番、美しくしり

と思う。

秋の空、ほんとうの空を見ることができる

既前を国道迄出ると、バス停がある。塩天温泉行のバスに乗る、湯川溪谷入口で降りると、塩天ススキノ路へと道は向つてゐるのだから、三階滝を渡り、樹林の中を行くと道は一命し、三階滝を経て厚尻岩へと直掛厚尻岩へ行く。

三階滝へは右へアツク林の急坂を下ると途つほと出る。ここからは滝は下の二段しか見ることのできない。右岸の急坂を登りてへはりつくようとして登ると厚尻岩に出る。

景色はすばらしいので時をまつのも忘れず眺めてゐる。

向もたたく行くと川懸急である。ここを右の支流と右の川でへ橋を渡ると平コースの左の本流空口と道をもとを走ると合流する。

前方へ行くのは由緒長くと美雪が森へ森とは名ばかりと鉄山の急坂がならけてくる。サウザラした斜面をたつめると雪の脊と出る。坂下には沼の平の噴火口が見える。沼の平を越えて蔵葉越山脈を越り対岸に渡ると右岸急坂と白糸の滝が絶ゆる。右は急坂を沼尻まで行き、沼尻からバスが猪苗代駅へと出てゐる。

○御坂山塊（御坂峠より大石峠まで）

△地図▽

*都留、甲府

△コース▽

河口湖駅 御坂峠 三ツ峠入口

御坂峠 〇三〇〇〇 三ツ峠入口 〇三〇〇〇

御坂峠 〇四〇〇〇 三ツ峠入口 〇四〇〇〇

御坂峠 〇五〇〇〇 三ツ峠入口 〇五〇〇〇

御坂峠 〇六〇〇〇 三ツ峠入口 〇六〇〇〇

△時期▽

一月

一番のバスに乗り三ツ峠入口で下車、すつぱりさびれた車道を天下茶屋のある峠まで一時峠のアルバイト。想像しては可いところにして遠め。茶屋と富士山のををすまじい景色からずむりた。茶屋も今は骨組を残すのみであつた。天気がよければ、一日中富士山を左手に眺めながら楽しめる。

一月と四月に歩いたが、いずれも雪が降り、ちよつぱり雪山の気分を楽しませてくれた。スベツツは必要。河口湖駅前には飯治させてくれる店もあり最近はずいぶん少なくなつてきたようである。

○御産山（おぐらやま）（長野県）

△地図▽

*十石峠、栗新山

△コース▽

上野駅 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

△時期▽

〇 鹿狩から冬

〇 六月頃

南に久野最高峰。モミ、ツバキの原生林におおぬを歩き山。シヤクナゲの咲く頃も展望とともにはじけり。ハナ岳や南アルプスも、奥秩父、上信越の山々が目を楽しませてくれます。

○大菩薩（山梨県）

△地図▽

△コース▽

△時期▽

塩山……裂石……大菩薩峠

△時期▽
積雪期

積雪直後以外であればトレースもしつかりと
つりており、ロングスパツツでOK。南ア、宮
士山が目の前。

○ハヶ岳（山梨・長野県）（11月2日）

△地図▽

※蓼科・ハヶ岳

△コース▽

小海……稚子湯……夏沢峠……流巻岳……

横岳……赤岳……板現岳……編笠山……山

淵沢

△時期▽

九月

○鳳凰三山（山梨県）（11月3日）

△地図▽

※韭崎

△コース▽

母房……夜叉神峠……薬師岳……観音岳
……地蔵岳……猿頭……御産石鉱泉……

韭崎

△時期▽

積雪期

正月であれば、トレースも比較的しつかりと
つりてはるが、冬山であるので経験者
の同行を必須とする。

○雁が腹摺山（山梨県）

△地図▽

※都留

△コース▽

大月……金山温泉……金山峠……山頂……

……大峠……桑西……大月

△時期▽

11月5日月中旬

○小川山（山梨県）

△地図▽

金峰山

△コース▽

韭崎……瑞穂山荘……富士見山……ハ木平

……小川山……裏瑞穂……金峰山荘……川

端下……信濃川上

△時期▽

積雪期以外

奥秩父の良さがまだ残ってゐる。残雪の時は道が不明。又、無雪期の時でも金峰山荘方面は途中より道がわかりにくいため富士見小屋からのピストンを進める。

○白峰三山（山梨県）（三泊三日）

△地図▽

韭崎・市野瀬・大河原・御天

△コース▽

甲府……△河原……大樽沢……ハ木街コル

……北岳……向の岳……農鳥岳……大樽沢

……奈良田……甲府

△時期▽

10月（紅葉の頃）

○平標・仙ノ倉（新潟・群馬県）

△地図▽

四万

△コース▽

湯沢……元橋……松手山……平標山⇄仙

ノ倉山……土樽

△時期▽

七、八月

○白山（石川・岐阜県）

△地図▽

白山・白川村・白峰・紐が岳・志鳥岳

△コース▽

金沢……白山下……別当出合……（砂防新

道）……山頂……黒木コ岩……（観光新道）

……別当出合……白山下……金沢

△時期▽

七月下旬

白山の花クロズリがあなを待っています。
この花を△△△する人△△△すればなんとや
う。

○鳥帽子・湯ノ丸（長野県）

入地図

上田

△コース

上田……日向温泉……鳥帽子岳……湯の丸

山……鳥肉峠……旧鹿沢温泉……上田

△時期

土月上旬

レニゲツツシが満開です。

○破戸高原（長野県）

△コース

長野……須坂……小串鉾山口……毛無峠……

破戸山……オブリエの庭……五味池下り

ロケルン……五味池……壺丘……須坂……

長野

△時期
6月中旬

レニゲツツシが満開。夫々が恵りと五味池下
りロケルンがわかりにくく。

○会津駒ヶ岳（福島県）

入地図

檜枝岐・燧ヶ岳

△コース

上野……会津田島……檜枝岐……駒ヶ岳……

山（中門岳）……大津岐峠……キリンテ……

……会津田島……上野

△時期

紅葉の頃

山全体が紅葉さし、それは見ごときぞ。

○妙高、火打、焼山、雨飾山（新潟県）

△地図

妙高山、小滝

△コース▽

黒姫……熱温泉……新高山……火打山……

焼山……金山……雨飾……旗山新道……根

知

△時期▽

七月下旬

行たはともめれ、一度は行って受なくまは。
すばらしりの一言です。

○谷川岳（群馬県）

△コース▽

二合……敵剛新道……谷川岳

△時期▽

残雪の頃。（八月）

○四阿山（新潟県）

△コース▽

上野……鳥居峠……四阿山……赤子岳……菅平

△時期▽

初雪の頃（八月下旬）

○白馬岳（朝日岳）（富山・長野県）（七月三日）

△地図▽

白馬岳・小滝

△コース▽

白馬II 猿倉……大雪溪……山頂（右）……

雪倉岳……朝日岳（泊）……北又II 泊

△時期▽

七月中旬～下旬

高山植物を見たい人の為に、雪倉岳からは人
も少く割と静かですルプスを楽しめる。

○日光白根（栃木県）

△地図▽

日光

△コース▽

日光……湯元……白根沢……山頂……五色

山……湯元

△時期▽

六月中旬

ララネ子才イの群落が見事。

○上州三嶺(群馬県)

△芝田

遠見

△コトス

後河内神社...大岩...出雲...

沼澤多...上敷

△時起

早春

ほとんど会う人の...出成は...道が...

○黒姫山(長野県)

△地田

戸隠

△コトス

黒姫...上頂...雲霧...

縁石と光るヒカリ...の展望。

○天城山(静岡県)

△北野

伊東...藤巻寺...下田

△コトス

天城山...かき池...万三郎...万二郎...

△高原口

△時起

一石

天城山...雪山...足こし...

○明神・天狗山(山梨県)

△地田

金峰山

△コトス

信濃川上...天狗山...高野山...天狗山

△時起

十二月初旬

スリル...岩尾根...ハナ...

○大倉高丸（南大菩薩縦走）（山梨県）

△地図▽ 都留・丹波

△コース▽ 初鹿野！田野鉢泉（泊）！湯の沢

峠！大倉高丸！大谷ヶ丸！浅子山

！笹子

△時期▽ 冬

白り南アルプスと富士山を終始ながめられ、
減勢に人に合うこともなく、静寂そのものである
が、少々道の不明な所がある。

○両神山（奥秩父）

△地図▽ 秩父、三峰、万場

△コース▽ 西部秩父！浦島口！清滝小屋（

泊）！山頂！西岳！ハ丁峠！金山

！西部秩父。

△時期▽ 初夏

時間によつては小屋より下方の両神神社社務
所での宿泊も可。この季節はヤシオツツジが美
しく、また山頂からハ丁峠への岩場も困難なこ
ともなく、おもしろい。

○岩手山（東北）

△地図▽ 盛岡、奥石、沼宮内、八幡平、

△コース▽ 栗石！洞張！尤倉山！姥倉山！

不動小屋！山頂！姥倉山！松川温泉

△時期▽ 秋

紅葉と、眼下の御苗代湖との素晴らしりコ
ントラストの鬼ヶ城尾根。その紅葉の尾根を
下から見上げる火口原コース。まるで趣きの
違ふ二つのコースを組み合わせれば、秋の山の
良さが充分に味える。温泉も近くである。

○会津田代山（会津）

△地図▽ 松枝、越後、赤沢、川治、

△コース▽ 会津田代！湯の花温泉！小田代小

屋！山頂！小田代小屋！湯の花温

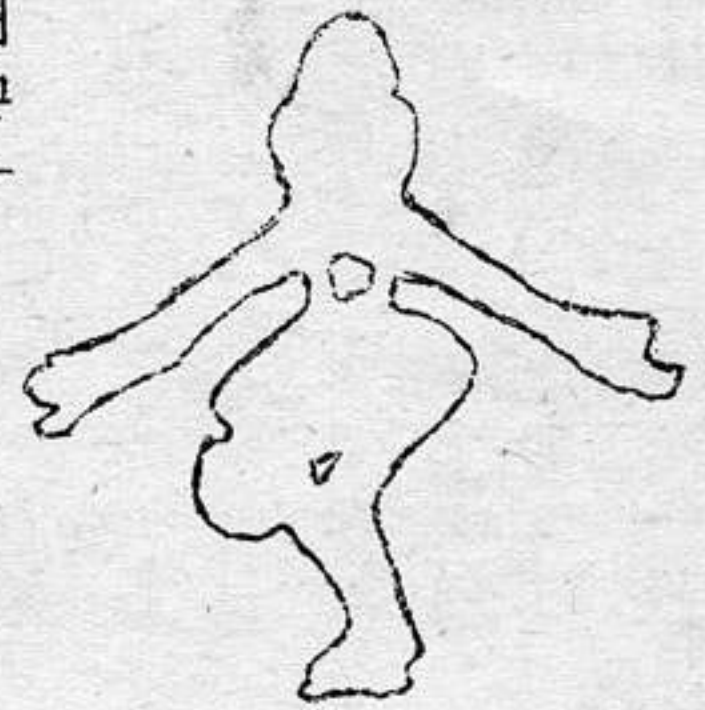
泉

△時期▽ 夏

どこが山頂かわからぬ程広し湿原の頂き
。47年夏から木道ができたとか。歩くのに困
難はなくなつたが、二山以上南流されりう
ちに行つておれを方か………。

二つ の山

吉田典子



どんな山も、私につまりまらな山はなれ。高低、天気にかかわらず、山を歩いてるだけで何かしら楽しくなる。土曜日の夜、ザックを背負って家の門を出るや、小走りで駆け出したくなる様な、そんな気持ちで、山を歩いてるこの頃です。りつ頃から、こんな気持ちになったのか、原稿のメ切りは追われ、この二、三日クラブに入ってからの山行を振り返ってみました。私がクラブに入って最初の支部山行は、五

月の谷川岳でした。この山行が私の今日の心境を成り立たせるのに決定的な要因になったのはいなめません。土台から巖剛新道の入口まで信じられな程、立派な舗装道路を行き、突然、新緑の木々の先に谷川岳が臨まれた時の痛い程の物の高なりを忘れることは出来なれ。夢中で登り、夢中で降りてきたが、急な雪渓の登り、灌木の中の石楠花の花、頂上からの景観、夫の無気味さ、等々、昨日の事の様は、あざやかに思い出される。肩の広場に越後側を向いて寝ころがり、霧が滝の様に見える山頂から谷に向かかって、絶えまなく流れ落ちるのを、何とも不思議な思いで眺め続けていた。私は良いスタートを切ったと云えるだろう。天気にも、体力にも、気力にも恵まれたベストの山行だった。この山行によって私は登山の醍醐味を知った。やみつきになったのだ。

でも、この頃は、まだ山に出掛けるのに心楽しい気方には到底なれなかった。ザックをつめていても、山に向かうタクシーの中で

も、今度の山は果して自分に登れるだろうか、そればかり気にかかった。登る山を前に、何度喜びの為でなく、緊張の為、胸がしめつけられる様に感じたことだろう。

そして夏山。先輩と二人、八幡平をかわけりた、岩手山、早池峰山に三日四日で登る予定で、八月初旬上野を発った。私にとって、初めての夏山ではあるし、又初めての重リザックを背負っての山行だった。岩手山は学生の頃、東北を旅行した際、小岩井牧場から、秋田駒の頂上から、又東北本線の東窓から眺め、強く印象づけられた山だった。特に、東北本線、支民あたりからの岩手山は見事で啄木の歌が実感として伝わり、ひとく感動した思り出がある。その岩手山登山が大変だった。私が初めて、苦しんで苦しんで登った山にほったのだ。萩川温泉を早朝発ち、ゆるり登りが姥倉山まで続く。ものの30分を過ぎぬうちから私は駄目だった。腰が痛くてしようがなかった。おまけに靴は新しく、これ又足に

合わず痛り。悪い事と天気までぐづつき相減で、泣き面に蜂。黒ヶ城をよろよろしなから歩き出した。2歩行つては休み、3歩、歩行ては息を寄りがかり、同行者はたま。たものではなかつたらう。霧雨の中、不動平の小屋を見つりて時は、お盆ほとした。あつり紅茶を飲ませてもらひ、震えながらレモンをかじった。最高峰葉部岳も踏まず、二人ともほとんど、口をきかず、全く、返わらる者の如く、駆け下った。登山道の両側には、たくさんの高山植物が咲いていたが、それを眺める余裕すら私にはなかつた。ただ、みじめな思ひばかりが去来した。こうして苦勞して登った山が、今や私の真事な山となった。深田さん流に云えば、「丸好きな山となつたりだ。苦勞して登ったからこそ、そう存つたりだ。岩手山は私の本当に難り登山歴が又これから行うだろう教養く山行の中でも、記念碑的山になることは確かだ。この夏山の後、私の山行の回数もエスカレートし、又山行に対する気

持も変化したのだから。つまり、天候はどうにもならなりが、どうにかできる自分の山行に對する気力、体力、知識等の充實を常に念頭におりて生活しようと思つた。山登りが普段の生活を律する様になつたのだ。それだけ、山登りが私の生活に入り込んできたと云える。

そして、秋を迎えた。秋も、山々はスバラシかった。

冬。初めて雪の降る中、頂上を目指した。信じられな程の美しさだ。

そして又一年余。山行を重ね、私の山への思ひはつらなる一方だ。普段の生活が中途半端なものであつた。私の山への傾斜は強まるばかりだ。確かに山を歩いてゐると柔らかな、満足を感じる。しかし、目指した頂上を踏むや、頂上から、又、次に目指すべき山々の頂上は多かりかを見て、絶望的にさえなる。登る山がまた、よくさんあつて良けとほろえられなり昨今である。後には何も残らなくて

も良り、夢中で、めっちゃくちゃに山を登りたけと熱望する。

山への傾斜

井出貞晴



五年前夏、まだかわりり小学校五年のとき北八ヶ岳の白駒の池にキャンプに行った。親子湯から入ったのであるが、日頃見ていた山の山と全然様子が変わる。原生林の中は、大きな木々が伊豆をかきすようにおおい根元はまだ人足さぬみ入れたことになりような蒼々でおお

われてりた。りまのようになどを歩いても空
きかんなどのようなゴミはどこにもなかった
ように記憶してりる。持ちものは、小さなナ
ツパサックに飯合と米、水筒、明具に大きな
ナイロンのフロシキぐらり。

白駒池畔で飯合を使つての食事、たしか夏黒
にこげつりたボロボロの飯を食べたのを思え
てりる。その日は白駒荘に泊り翌朝早く高見
石に登つてはじめて視界が開けた。ここで山
に登つたんだなという実感が湧いた。それま
では自分かどの位り歩いて、どの位り高り所
まできてりるか分からなかつたから、この高
見石から眺める白駒池の神秘的な美しささら
に下にひろがる樹海、遠くに浅間山その向に
ある佐久盆地の狭りこと……そんなのを眺め
ながらここでかくれんぼをしたのを覚えてり
るが以上が私の初めての山歩きであつた。二
回目は、それから二年後の中学の時八ヶ岳に
行った。同じく稲子湯から緑池、中山峠、天
狗岳、根石岳、箕冠山、オーレン小屋(泊)

硫黄岳、横岳、硫黄岳、夏沢峠、本沢温泉、
松原湖と歩いた。赤岳まで行く予定であつた
が天候が悪く中止となつた。この山行ではじ
めて雲の上に立つことができ富士山、日本ア
ルプスの山などばかりのムネをワクワクさせた
。この時は廻りの山の名前などは富士山位し
かはつきり知らなかつた。雪海をながめなが
ら歩き、コ下は今ごろ雨だろうと等と優越感
にひたつたものである。この時の在庫は四合
全部オニギリであつて一人10枚付つて行つ
たと思う。また、服装はGパンに運動靴、学
生帽子と軽装であつた。ここでずれ違つたッ
コイイお兄さん達にありさつされて、てれく
さかつたり、うれしかつたり、こんな昔の思
ひ出が最近になつて急に山歩きを初めた動機
である。





奇襲陸子

りっの頃から山に興味をもつようになつて
 が願みると、りろく／＼存想で唯にでも思ひ出
 はあると思つたが、子供の頃、下ルアスの水女
 とが大好きで時におじりさんの家の屋敷裏か
 ら眺める山の美しく変化する様を、そこはか
 り何度繰り返して読んだことだらう。

私の両親は、辺鄙の生まれで、我が子供の頃
 よく山菜取りに歩いた山の話をするれば、母が
 故郷での懐かしい味雨時の生活の事を話すと云
 うように、持にふれ即かさぬてけるうちに、
 当時を懐しく思ひ出してゐる事や、生活に密
 着してゐる山の苦しさをより、自然の美しさ
 により魅せられてゐることと、りっしか私も

未知の山に親しんできかたのようと思つて
 る。

中学生の頃、毎日新聞にマナスル登山隊の記
 事が連載されたことがある。

毎朝巻校前、その巻を読んだものである。きつ

か付は、毎日の献丑がしるさぬていたのが、

目にとまつたからである。日がたつたに、

面白くなつて巻頭が特に出たのを覚えてゐる。

。全くの別世界ながら、山に対する者在的た

極限は持つてゐると思つたが、自分必歩んでみ

ておれと思つたやうになつたのは、何れもよく熟考

ぬるままにいつていつた、美しき森、牛首山

へのハイウケからである。

高歳を終えて一、二年してから、たと思つ

。寝不足とさつぱり盛りに苦しめられながら、

何で来てしまつたのだらうと後悔しながら

も、どうやら登り終つた山を降りて来る途

中、ガシメの上をおさう／＼ぬえ、て小休止

、胸のくひらけを大きな空間が一層に目に

映り込んできた。誰かが、可なりが南マール

プス。口と指さす方に目を転じた私は、
口あつ／＼と声をあげ、息をのんだ。

深い紺色をした山々が重なりあうようにして
力強く、広り／＼空間にが／＼しりとまわつて
た。その時、

口バアーンと云う旅行杖の音が確かにあの
山山にこだまして、私の胸に打ち込まれた。

寧ろ山の優雅な曲線も、奥秩父の黙々とした
山容も目には入らなかつたが、南アルプスだと
教えられた山々に、をど／＼圧倒された。

地図の上に濃く茶色にぬられてゐる山々が猛
烈な執りで立体化され、頭の中り／＼ぱり／＼と
か／＼てり／＼た。

あれ以来、赤石山脈が南アルプス、飛騨山脈
が北アルプスとリウのように親しみこめた呼名
にかわり、山に昇する憧れがはつきり意識さ
れてきた。

あのような光景、あの感動を求めて、多くの
山を歩いてみえりと思ひつゝ。

山との出会い



山田 譲

口何故山に登るのかとこれによく聞かれる
奥向であるが、もし、私に向われたら口人は、
何故生きるのかと口と同じ奥向であると答える
であろう。片親しかりなり人の気持ちと同じ境
遇の者が一番よく理解できるように山登りの
良さを理解させるには先に汗水流してもらわ
ねばならぬだろう。

さて山登りのメジャー（語句の基準）はど
こにおけばよりのだろうか。

それによって山登りのスタート地点は遠く
くろからである。

私は、たとえ50M足らずの山であっても登山

者自身が山登りだとりう自覚のもとに登れば
それは登山である。北アルプス立山にゲタバ
キで登っても行楽客でしか有り勘合もある分
らである。

理屈はこの辺で、私の山との出合り、それは
は今から15年前の小学校までさかのぼる上級
生の丹沢山系大山真田夜間登山に始まる。

ふるような星とお母様を見ながらヨイシヨイ、
ヨイシヨイのかけ声で石段を登り、やつとの事
で明け方頂上に着いた。そこから眺望は綿
のような雲海が一團と敷きつめられホッ、
ホッと山の頂が顔を出してつた。

七色五色とも云うべき御来光を見るとき感動
のあまり万才を歎した事を今でもハッキリと
覚えてゐる。15年前の感動を忘れずヒッるこ
とは、リカに強烈な印象を幼い私に与えてく
れをことか。

その後、中学、高校、大学、現在と山を登

り続けてゐる私ではあるが、山との出合り、
そして、基礎技術を覚えたのは中学、高校時
代に感った丹沢である、そして、成長期は大
学時代であつた。今は静かにひとり山歩きを
楽しむケースが多くなり考え、味わう山登り
へと変化してきてゐる。

私の生活信条、それは「自己に忠実である
」たとえ人をだましても、自分自身を偽るこ
とは決してござらぬ。職場生活で、交遊関係
でロクも自分が自分であり得たであろうか。
私は自然との対話を愛し、喜び、悲しみ、苦
しみと素直な心になつて味わう明日のエネル
ギイとしをけ。

山を遠慮の病と考える人もあるが、私は人
間らしい人間へ未來的意味の人間性へとなる
ことを期待し山に登る。四季のうつり変り、
日々来して同じではな山、その大自然の山
ふところと包まれたとき、自分を静かに見つ

めることができる。

私は命あるかざり山との対話を続け、自己の
信条をまっとうしたりと日々思うのである。

ぼくはあえて静観的な態度で山登りをやっているとい
おう。しかし、ここであれぐれも誤解のないように注意
してほしいのは、静観的というのが低い山歩きや、衆な
山登りをさしているのでもなく、すこしの危険もないよ
うな尾根すじや溪谷をいつも哲学者や詩人ぶった態度で
思索や瞑想にふけりながら歩いているという意味ではな
いという点である。静観的というのは、山登りにおけ
るはげしい身体的な行動と、危険をふくんだ肉体的な緊
張のみを享受するにとどまらずして、そのような行動を
ふくめてより豊かな心をもって自然を観照しようとする
態度である。

又より

山行の足跡



山田 進

私が初めてキスリングを背負って歩いたのは支部に入会して一年ほど過ぎた、5月の連休巻杖山から谷川への3泊4日の縦走でした。なにせキスリングを背負って山に行くのは初めて雪の山も、まして、マイゼン、ペツケル、幕営山行、なんてのも考えたことがなかった。自命はどの位、歩けるのだろうかと不安に存り、一ヶ月前より肩休み一周3kmの場内まきマラソン。歩き出しの30分間は苦しかったがおかげではてることもなかったが春嵐のため、ジャンクシ

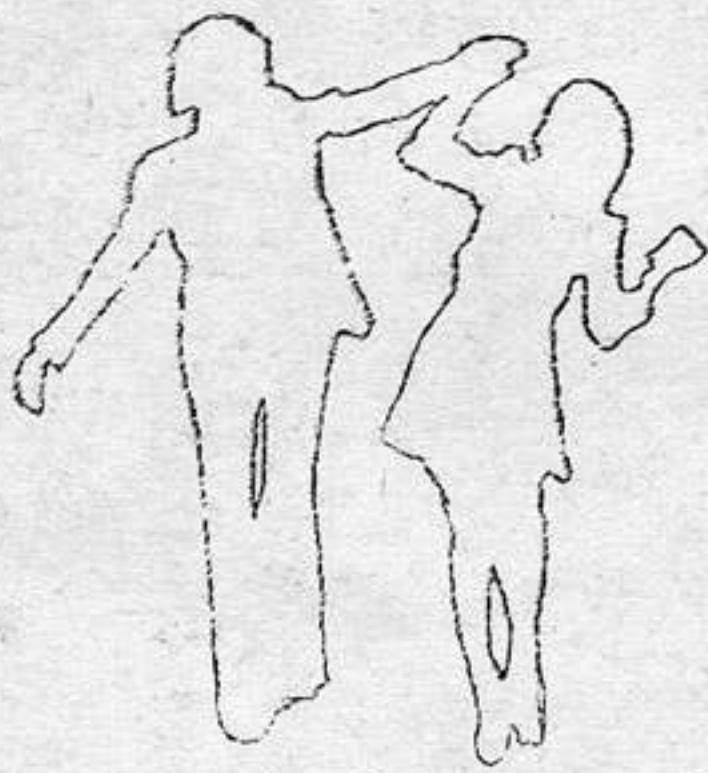
モンペ、ワで一泊した翌日はものすごいわ、清水峠へのナヤマリ、ジダ通過できつても春清、この日の夜は天幕が飛ばされるのではなかりかと思ふ位の強い風が吹きあられ、天幕ごと吹き飛ばされて、俺の人生も〇〇才の年でおしまりかと思つたが、どうしようわけが無事下山。土合駅で飲んだビールがうまかったこと。その年の七月には頸城マールプス、妙高山から雨飾山、3泊4日の縦走。連日雨、また雨の中の山行、おまけに天に迷り込み、肉体的よりは精神的にまりつてしまった山行でした。でもこの山行は私にとつて生涯忘れられないことのできなり思ひ出でり、ぱりとなりました。降りしきる雨の中を、川の中を歩いていけるような登山道を高谷池ヒュッテまで歩き、小屋で

トン汁を作って、ちよっぴりくどく
はあつたがでもおいしかった。火打
山では雲が、つかの間の雨切れた時
に、日本海がみえた、見えないうと。
そんな事はどうでもいいのだ。確か
に私には見えないうと。焼山の下りで
は次に迷い込み、これは道もなかり
。道もなかりと云いながら一時向半
近く下って燃やした時、ガツク
りきてパンを食べる元気もなくなつた
。翌日も又霧を見峠で迷い込み、も
うさんざん、さも途中には高山植物
ビッシリ、ここにはさくもなくなつた
てや監視員もいない。シラネアオイ
、日光キスゲ、数えたらさりがなり
ほどたくさん、花々が咲きほこつて
最高のお花畑、金山では皆んな声も
なく帰りをさうな顔、でもなつか
んだわけのわからぬことと云つて

ついに雨飾山にたつた時、感激のあ
まり久保田さんに握手をした。いま
まであじわつたことのないう感激これ
からもないうだろう。雨が最良の感激
だつた。下り道の真暗の中を麓山新
湯とたどりつた時、日人とうに来
てまかつた。又いつか来てみよう。
そんな気持ちで一パイでした。
それからの思い出に残るキスリング
山行は10月帝念山脈へ3泊4日、初
めの北アルプス、今まで遠くから
あこがれのまなざしで見つめていた
。麓、徳高が目の前とびえ立って
いるではなうか。
11月には守内山へ2泊3日、水の吸
い込んだウイニパーの重たこと
。翌年5月には、5泊6日単独で秩父
金山縦走。
8月には支那山行の朝日連峰縦走、

12cmのキスリングを買リ、天幕、コ
 ップ、エル、シユラフ、ナベ、その他
 もうもろ30kgをだりが越えていたよ
 うで、歩く時は前の人のかかとを見
 ながら歩くと表現するのむろうが、
 かかとどころか、前の人とはむろい
 はなされ必死になつて登つた。先頭
 が休憩、私がそこについてからの教命
 で出発、とても苦しかった。でもこ
 の山行は私に自信を持たせてくれた
 。目の前に見える飯豊運峰、すわり
 と見える山々、きつといつかは登つ
 てやるぞとますます山と対する気持
 が高ぶつた。そんな山でした。
 ”山へ行くならキスリングを背負つ
 て苦しみながら登りなさい。さつと
 山頂に立つた時の気持は、あなたに
 とつて、だれにもあげられぬ最高
 の宝物と存つて残ることを。”
 支那に入会して3年あまりの私です

が、山は私にとって切りはなすこと
 ので、きなりものとなりましを認めな
 したもキスリングを背負つて山へ行こ
 うしよう。



夏又鳥

旅行記



渡辺三世子

永田の疾にて

赤でもなり

朱でもなり

燈色、黄色、金色？

いりえ、いりえ

口え永良部島のむこうに

日が沈みます

振りむけば

特徴ある永田岳の白い山容

濃い緑の中に

その姿だけが白く光る

口え永良部島が黒一色に塗られた時

うしろの空がバラ色に染まった時

海が赤く光った時

泳いでいる子供がシルエットになった時

明日は踏むであらう

あの永田岳と

白い／＼永田の疾に

お別れしなければならぬ

(S. 47・8・6)

小杉谷荘にて

”あんなたち、泊りかひ。どこか

ら来た？ ハイ、ひとり二百四、電

気、水、使のほうだり。

うんざりしていた軌道歩きの前

に、薄い虹がかかり単調さをいやし

てくれを時、ひよっ。ニリ現ぬれをの

が、この川杉谷荘。色の黒いやせびすのこのおじさん、よく口がまゆる。"きのうまで14日も降らんとですよ。上は何も見えんか、ちやろ。きのうまではここからミヤ岳へ宮ノ浦岳のことしがよく見えんやから。この雨で喜こんどるのは屋久島電工、ダムはカラノ。アー、荷物はそのに置いて、ワタナベさん他一名を。今晚八時からスライドするから電氣は消します。スライドはサービス。百円下さいなんて云わな。アంతタたち、下りは楠川ネ。アイハラさんとよく説明しておれをから一諸と下りんさ。アイハラさん、アイハラさん、この人たちと一緒に下りんさ。"このおじさん、親切にも我等の下りコースを自分で決めてくれる。宇房より短りとのことなので、まあ良りで

しよ。さあ、流れをくつ下をぬりで、雨具を干して、食事の仕度にとりかがろう。今夜の献立はカレシウイス、のり、梅干し、お吸物、おじさんいあ、"新橋の味ダネー"大粒の雨が断続的に降つてくるので、外での食事は諦めておじさんの出してくれたちや雨台で食事とする。"お客さん来たら教えてや。"と頼まぬてい。"で大航がし。"オジサン、お客サン。"午後六時を過ぎているのに続々とやってくる。そのたびに評屋から出てきて"ハイ、お客さん、お名前は、ひとり二百円、電氣、水、使いはうだ。ホレ、備え付けのスリッパをはいて、スリッパ、スリッパ。今晚八時からスライドするから電氣は消し

ます。 “ と同じことを繰り返して
いる。

初めてたくコップフェルのご飯の出
さめがりに多りに満足して食事を終
える。前夜、強風の中で張ったツエ
ルトが倒れたのを補強したり、ホー
ルにしがみついたりして一睡もして
いなかったの、非常に服い。こも、
おじさんがみんなと宣伝して、この
で無理して起きている。おじさん、
とり時。全員集合して、おじさん撮
影のスロイドが始まる。かなり気が
短く、焦点があつたかと思うとカキ
ヤ／＼と場面は変つていく。黒味
岳から見た宮え浦岳と永田岳が印象
的だった。

幸か不幸か名物の雨にあり踏めな
かつた黒味岳、荒いガスのためなが
められなかった夕日、雨と風の中夕

ツキした宮え浦岳。
長い肉思ひ続けていたこの屋久の山
々。
天候には恵まれなかったけれど、永
田岳から見られるのであろう太平洋に
沈んでいく夕日が、今でも私の心で
赤く燃えている。

夜が明けてもまだ降り続いてる
。日定にゆとりがあるし、食糧もま
だ残っていることだから停滞と決め
こもつ。雨の中を出発する人を見送
るおじさんは、心配でたまらない様
子。
“ホシ、出かける人は早く、かたま
って行きなさいよ。この軌道に居つ
てまっすぐ18km、軌道が終ればもう
守房。すべるから小またでな。楠川
は水が出ているからダメだ。 “
下山する人が出払うまでこれを繰り

返してゐる。このおじさん、新切で、
 しい人なんだなあ。ケラシとて
 しまったこの小屋、十人程の人が残
 っている。口もよくまあが、まあ
 と動くこのおじさん、ひまなんだな
 あ、と一人言を云つてせか／＼と掃
 除にかがる。手当り次第掃つてしま
 うからスリッパはあ、ちへ、ゴミの
 袋もあ、ちへとみんち／＼目の前か
 ら消えていく。気は短りけど物さ産
 なんだなあ。流しも、ゴミもさちん
 と処理さぬてゐる。
 ”ひと月と五身降るといふのは雨量
 のこと、毎日／＼降つていたら地物
 は腐つてしまふがな。”と、今日はこ
 の言葉も口ぐせのやうに云つてゐる
 。なるほど、この雨は確かに程が
 んきり。バケツを逆さにしてように
 降るとはま、たぐのこと。でも、降
 り続く雨といささかうんざり。

”五塚山が見えたからもう晴れるよ
 。”と、いふおじさんの言葉を信じて
 、明日を期待しよう。

また、雨。でも辰程はなにし、永
 田で一晩お世話になつた、やくの子
 の家上の人も心配してゐるといふな
 り。で、今日こそ、雨の中を下山せ
 るはなうなり。
 ”ワタナベさん、この人と着いて行
 きななり。何度か来てゐるベテラン
 をから。精川は水が出てゐるから守
 房へね。執道が終由はもう守房。ま
 つす女行三をさ。ま、すく。い
 と心配してくぬる。ほんとと、い
 人なんをさあ。

さようなら おじさん
 さようなら 水杉谷
 今夜いつ来ぬるかぬがらなりけぬど

もう来れなればかも知れなればけれど
ぜひく、もう一度お会いしたります。

おじさんに
屋久の山々に……

「自然保護指導員 環境庁」とりう
緑の腕章を巻いたこのおじさん、
お名前は、
若林さんとおっしゃる。

(S・47・8・10)

やくの子の家

あまりに永田の涙がすばらしくて
あまりにもやくの子の家がなつかしくて
また、ここにもどって来ました。
「心配してたんよ」と、おぼちゃん。
「よう、無事だったか、とうして一
日遅れた」と鉄生さん。

「お帰り」と、飲み過ぎで済えなれば
ゴンちゃん。

十日に帰ります。と、云って出て
行ったのに今日はもう十一日。
ごめんなさり。心配おかけして。
「まあ、ともかく今夜は焼酎で乾杯
だ！」とニコくくして云う鉄生さん。

さあ、無事登山を終えたことだし
、のんびりとこの夜で休養だ。島め
ぐりも、種子島も返上して、この永
田の森で。

今日も見せてくれるかな、あの夕
日と、輝く永田岳を。

(S・47・8・11)

登山の

登山



加藤 潔

ハが岳の縦走を振り出しに山歩きを始めてから5年、いろいろ山へ行き、いろいろなことがありました。雷との追いかっこ。誰もいなり。落葉の山、足のわんざ、山頂での昼寝、雪山、……etc。でも山を歩くことだけが登山の楽しみでは有り。実際の行動がオ一の登山なら、計画から思ひ出の中にオ二、オ三の登山があるのでは有りでしょうか。そして私の場合は山行にいつでも一緒に持つて行くカメラ、即ち写真の中は私のオ二の登山がめるのです。

写真は山の思ひ出をより立体的にしてくれます。今はカラー写真も手軽に利用できるようになって、朝日、夕日、花、……などにも実にすばらしい力を發揮します。でもカラーは全部写真屋まかせです。現在カラー写真の陰になってしまったような白黒写真、これが僕のオ二の登山になるのです。

山で写真を撮り始めてからごんごんおみつきになり、写真屋まかせで引き伸べているのでは物足りなくなつたのです。そしてへたなカメラも白黒写真は現像からプリントまで自分でやるようになった。そこでいろいろ知らなかつた新しい発見をしたのです。現像をいろいろと印画紙にだんだん絵が出てくるのですが、その時の気合が、山頂でいよいよ目の前を隠していた濃い霧が

急に吹きとばされて、展望が得られ
 た時の感激をいなりなものが湧いてく
 るのです。もう一度、山頂に上るよ
 うな気分に浸ることが出来るわけだ
 す。実際、自分で引き伸ばして初
 めて知ることができた責任をいなり
 。これは何も山の写真に限ったこと
 ではないが、特に山の写真ではその
 傾向が大きい。自分で苦労して写し
 たフィルムだからである。だから
 せっかくなら行つた山行でも、天気が悪
 くて一枚も写真が撮れなかつた時、
 何枚か撮つてもあまりいい写真はな
 いような気がする時は、いくつ変化の
 ある楽しい山行であつたとしても、
 帰りの電車の中ではなんとなく意気
 消沈してしまふ。それだけか一の登
 山とカエの登山は密接なものになつ
 てしまつたやうである。
 僕はこれからも山の写真を撮りつ

づける、そしてカエの登山を楽しむ
 つもりである。ここでもう一つ、山
 でカメラを持って行くと、疲れた時
 に写真を撮るふりをしてゆつくり休
 むことが出来るのもまたいい。

日本脱出の思い出

脇 美英子



七月二日（日）十八日までの十七日間
 パリ、スペイン各地、ローマと週
 一往復して来た。

七月二日、夜十時過ぎ羽田を飛び
たつた我々は一路アニカレッジへと
向った。二時向程たつてから身持ち
良く寝てりた私は起こされてしまっ
た。眼の眼をやつとあけて外を見れ
ば太陽が眼にしみる。あすか二時向
の向に我々は日本からすいぶん離れ
たようだ。時計は十二時。朝食はか
屋食だが夜食だからなまりような
食事が出る。まずすの味だ。食後
はやはりウトウト、その間アニカレ
ッジに到着とリウ放送が入り、飛行
機からおりる。ここで一時向程休け
りてから再び機上の人となる。向
もろくまを食事。やはり食後は寝る
。何時間がすると北極に一番近り所
に来たとリウ。なる程下は氷がいっ
ぱいだ。また寝る。今度はロンドン
到着。ここでも約一時向休けり。ロ
ンドンからは四時向程に降り到着。

午前九時頃だ。たがしり。空巷でこ
川から宿泊する家族の住所が渡され
る。私は二人を泊る車に乗った。行
く先が同方向の人達と何台かのバス
に由かれる。いよいよパリに入る。
それらのに外国へ来た、今パリに
るんぞとリウ東惑が由かすり。でも
やはりパリだ。日本と全然違う。パ
リ初外は近代的なビル等があるが、
市内は古り建物が多し。道路の両側
には並木が緑深く立ち並んでりる。
そしてマバートのベランダには草花
の色とりとりに咲いてりる。そして
静かな町。こちらでは警笛を鳴らす
と罰金である。結婚式の車が通る時
だけは列だそうだ。さて、いよいよ
宿泊家族の玄関の前で連れてこられ
た。ここで他の人達とお別れ。二人
だけに入る。ここはマバート。パリ
の人達は皆マバートに住んでるよ

うだ。この家は割に直そうだがエシ
ペーターがあつた。四階まで行き、
戸口は一っなめをへルを押す。上で
コッコツと靴音がして、ギイッツと
トアが閉く。中からは眼鏡をかけた
ヤセぎすのおばさんがニコニコして
出てきた。二人で必死に英語をあり
さつをする。このおばさんも英語を
話してくるので物かつた。中はか
なり入り、まず部屋へ案内され、そ
れから昼食をこちそうとほつた。パ
ンとコーヒ。テーブルにッを時、
おばさんが、「フレイ、オア、ネス
カフェ？」と聞きました。ネスカフ
エって日本では商品名だが、フラン
スではコーヒ、それもインスタン
トの事を云うようだ。この日はまだ
パリの事をよく知らなりのに午後三
時まではナベレオンの墓のある寺院
まで行かなければならぬ。再び二

人で英語で説明する。おばさんはス
ラスラだがこっちは二人でやつと。
とにかくわかつたので、送つてくれ
るとりう事になつた。この人存がな
か運転が乱暴である。パリの人はす
ごりと降りていれがなるほどとうな
ずける。まずもうれつなスピードで
走つてがクンと止まる。そしてガク
ンと走り出すのである。この車もか
なりスピードが出ていた。行きはよ
りより降りは何とかがで、この家まで
自分達で帰るのがパリの毎日であつ
た。ホ一日目は地下鉄の駅を教えて
もらつて、地図を片手に帰途につり
た。初めて乗るパリの地下鉄。窓口
でお金を渡して指で自分達の降りた
り駅をさし、二本指をたてて二枚と
云つて切符とおつりを貰つた。改札
口にはおばさん達かりて切符を切つ
つてく出る。ホームと出て電車に乗

る。あまりきれいな車では有り、
ホームも日本のまうじあがろくはな
りが、何となくおちつてゐる。其
の所で地図と駅名をあわせてみる
と、二所は失敗とあつてあり、
反対のホームから又もとの家へもど
る。さて、戻つたもののあつた
まゝ線へ行く通路はどこかと思案し
て行くと、男の人が近寄つて来て我
々が指さした地名を見て行くべき方
向を教えてくれた。「それ、それ、
し等とりのなすうの方角へ行きた
に乗り換える駅まで行く事だ。ここ
。今度は失敗しなうじと地名と
通路の壁に書いてある字とを見くら
べながら、今度は間違ひなく乗り目
的地に着く事ができた。出口は誰も
りなりので構があるの事。そして切
符はそこらへんに捨てていくらしい
。階段を登つて地上へ出た。時計は

七時過ぎだった。が手を明るり。フラ
ンスでは日の光むりが九時過ぎのよ
うだ。しかも女時半すぎで十時頃
に存らなると驚くならなり。朝は五時
頃に甘もう明るり。さて、今度は我
々の為まる家のある通りを探さなけ
ばならなり。ここでは通り毎に必
ず通り名、そして各家には大きな巻
地が出てくるので探しやすい。通り
はすくぬがったが、番地が今ヨツと
見つかからなかつたので、廟りてみる
こととした。私々はフランス語は父
またから英語で話しかけてみた。フ
ランス人は英語を知つていても話さ
なると云ふので、私達か聞り
ておなごんは英語で話しかけに心
を切切にフランス語で教えてくれ
た。再びその方向に歩く。途中カフ
エでジュースを飲んだ。あまり言
葉が通じなかつたが、おもしろいジュー

スとフラニスパンのホットドックが
たやうな。フラニスパンはやはり
本場、ここが一番ありしり。
川さなおろで果物を置つたが、魚段を
りくらと云つて、ろんだかぬから、
りゆでお金を出して、先手をせよと、
てもらう、結構に死して、おれに毎
とか、存るものだと、乗しがつた。こら
して三日間、地固を寝り、歩け、
を離れ、今度はスペインである。
スペインへ行く時は、もちろん、シエ
ット、杖と思つて、りた、おに、プロペラ、杖
だつた。ピレネー山脈上空、気流が
悪く、ひどくゆれた。ロンドンやパリ
は上から見ると、緑が、多、スペイン
は、遠う、赤茶、色、を、高原、の、よう、な、台
地、が、ずつと、広、かり、その、台、地、を、深、く
き、ご、ん、ど、川、が、う、ぬ、つ、て、り、る。太陽と
情熱の国、スペイン、上、から、見、ゆ、ば
か、ゆ、き、き、つ、を、固、の、よ、う、で、あ、る。

空蒼に着いた。暑り太陽、乾燥した
空気、緑のなり平原、そして、その中
を一直線、ヒ、び、る、ア、ス、フ、ア、ルト、そ
水は、之、ト、リ、ト、の、市、内、へ、通、じ、て、り、る
。云、り、道、路、一、直、代、的、な、ビ、ル、緑、そ
東、洋、ユ、ト、リ、ト、ド、ド。二、の、所、は、水、が、り
中、心、街、の、建、て
物、は、く、ま、ん、ど、色、を、し、て、り、る。マ、ド、リ
ト、の、オ、ラ、ニ、ダ、ヒ、は、ア、ラ、ヤ、ゼ、ラ、ニ、ユ、ウ
人、等、の、衣、着、味、り、て、り、る。お、眉、所、は
人、運、り、が、激、し、り、風、流、の、之、め、帰、宅
する、ゆ、ぢ、そ、れ、が、ラ、ス、エ、タ、ス、一、層
寢、の、時、向、で、回、時、頃、ま、で、は、店、も、閉、ま
る。そして、午後、回、時、頃、雨、が、人、運、り、は
激、し、り、出、動、の、を、め、ぢ、こ、う、し、て、ス
ペ、イ、ン、の、ラ、ッ、シ、エ、マ、ワ、ト、は、日、に、四、度
ある。
マ、ド、リ、ト、で、は、本、テ、ル、に、お、つ、た。
ス、ペ、イ、ン、で、は、三、才、位、の、子、供、が、た、く、さ
ん、本、テ、ル、で、ゆ、り、て、り、る。皆、は、三、才、位

から物くらしり。翌日トレドへ行っ
た。スペインで一番古い所で昔の主
都であつた所である。ひまわりやオ
リイブの畑、又、玄野。工場はほと
んどなかり。その中にある一本の道を
100km位で走る。すれ違ふ車は少しだ
け。時々白り家がっながる村の中を
通る。暑りからまゆりは白り壁にし
て入口は川さく入ると中庭になり、
その廻りに部屋が造られてりる。そ
のうち遠くに島のようにトレド市が
浮んでくる。まるで砂漠の真中に現
われた屋敷構のようだ。城塞のよう
にまゆりまわり、内を入ると細り道
があり、家が建てこんでりる。道路
はすべて石を敷いてあり、坂が約く
非常にまがりくねっている。この所
を知らなかり人がはりつたらなかな
出られなかりとらう。ほとんど緑はな
り。太陽に焼かれてもう一滴の水も

出なかりほど乾燥してしまつたような
所だ。スペインには山川はなかり。小
さな川だとすぐかわりてしまふ感じ
だ。大きな川はある。でも何かうる
おりのなかり水だ。やはり太陽が強
すぎるのか。
セビリヤまで夜行に乗つた。駅は
大き。列車はあまりきれいでな
りか、六人ずつ部屋のようになつて
りて、座席はゆつたりしてりる。一
等だからかもしれなかり。向が広すぎ
て我々には向う側まで足かとどかな
かつた。やはり短りのか。セビリヤ
についたら日の翌日は日曜日。闘牛は
日曜日には開催される。やはりスペ
インで闘牛を見なくては。大きを競技
場は満員。何だか気持のするよう
な音楽がなつてはじまりはじまり。
初めの二回目危はめまり、気持ち
はしなかつた。牛がかゆいそうぞ。

でも見てりるうちになれてしまった。
そばにりたおじさんがスペイン語
とジエスエスアであれはソソとか、
いけなるとか説明してくれた。牛は
かわりそうぞつたが、最後剣をさす
所は見ごとだった。牛の背の首筋の
所から刺すのだが、真つすぐに入っ
てしまふのだ。そして牛がたおれる
と又変な音楽が鳴って一つ終る。
合度はずルハスブテ宮殿におまじ
みのグラナダへ行つた。ここは緑の
の町。シエラネバハ山脈が見える。
をりたりと4000の山だ。冬はスキ
ーがえきる。グラナダから地中海側
のムルシアとリウ野へバスで行った。
。スピードは常に100km/h。町と町の
間はものすごく距離がある。かなり
走つた頃、今日とひまわり畑だつた
のが次第に赤い土と変つて行く。真
赤な土で出来た平原を過ぎると今度

は白り土に変る。何時の間もそんな所
を通つてやつと大なる町に入つた。
ムルシアである。ここで再び各家庭
に別れる事になつた。大なる教会の
前に夕祭の人達が私達を待つてりた
。二人、三人、四人等のグループに
別れて紹介され、熱烈な歓迎の手ッ
スに迎えられ、皆悲鳴を上げながら
その人達と家へ向う。自分の名前が
呼ばれた。そしてもう一人の人も。
。かれその人は現われた。とうとう
う自分一人となつて紹介された人と
行く。かゆりりすの子が二人と男の
人。皆陽気で歌をうた、ミノしを掛
らこの町から離れて行く。スペイン
語はあまり合らなうが何とかする。
自動車を連ねてこられを先はサニタ
ホというところ避暑地。ものすごく清
人でりる海が眼の前にある。パルト
の田舎。紳士人は歯医者。英語が話

せる。奥さんはスペイン語のみ、子供は四才位と五才の女の子。もう一人いと子の女の子が遊びに来てりた。一人だったのが皆親切で、全然心配する事は有り。分らなり時は辞書でお互いに意味を通じさせる。毎日前の海で泳いざり子供達と遊んどりし。子供達とだからホイル遊びや、忘ケリのようにもあつた。この家にはオルガンがあつたので、いゝてあげたらとも喜ばる。日本の歌を教えてあげたり。わすか三日間をたかともすばらしり毎日だった。一人だったのがよかつたのがもしれり。

最後はローマへ行った。ローマはごみごみした町だ。ヒトヤかで車はうるさし、あまりさぬりには有り。トレビの泉へ行った時何人かハ方

から入つてくる車で皆勝手な方向を向いてブーブー警笛鳴らしてうるさいの。そのとりつたものすごり。よく「ナホリ」を見てから死ぬと云われろので、自由行動の一日を利用してナホリ、ポンペイへの観光バスに乗った。観光バスは二台で、一台は我々の泊まつてけるホテルの前まで来てくれる。車内はアメリカ人やフランス人、その他いろいろな国の人達が乗つてける。ガイドは若い男性でイタリア語、フランス語、英語をしてくれる。このバスで輸送するのは運転手が三回程道を誤ちがえそ事である。フランスでもスペインでもそういう事があつた。パリでは各家に送つてくれるのだが、運転手二人良くわからず同じ所をクルグもよく廻つた。あげくには道端に止まつて警官と向ひをり頭をかかえこ

人だりした。スペインニではムルシア
へ行く時、道を誤ちかえて田地のよ
うな所へ入りぬんでしまった。もし
をらここぞよくイタリ、味画を見る
ような洗濯物のほし方をしてりた。
さてイタリアであるが、道路標識に
大きくソレニトと書いてあるのに反
対方向へ行こうと、たのである。皆
で違ふ違ふと云ってどうやらソレン
トの方へ行く事が出来た。ナポリは
素通りだつたが海はきれいで、ずつ
と山の斜面には家が建て、深人だりを
。年と、老人達は滋味な黒の洋服を
着てりた。そして道にはたぐさんの
花屋さんがりて皆花を買ってりた。
ナポリからはホンパイへ行つた。さ
すが有名なホンパイ。ここぞをくさ
人の日本人に会つた。お互いに又日
本人がりと、いふ様を履をしてす
れ違つて行く。やりでも何人かに会

つたが、ちよつと声をかけたりかけ
られたりした。スペインニでは全然と
云つていひほど会わなかつた。しか
しここには違つてりた。日本人がゾ
ロロロりるのである。ぎつと向うの
日本人も私達を見て、まをりた。と
がツカリしを事である。帰りはモ
ニテ・カミノと云う所で食事をした
。パスの運転手も食事前酒を飲む。
日本だつたら大変な事だが、こちら
では別にたまわたりらしり。ローマ
へ戻る途中、又道を誤ちかえて今度
はカソリンスタニドへ入つてしまつ
た。ホテルへ戻つたのは十時頃だつ
た。
りよりよ帰国の日が来た。まをま
を帰りをくになりが仕方なり。帰路は
ハンブルグを由北回り。ローマを離
れて一番乗一乗りのはスイスである
。ローマからハンブルグへ飛ぶ場合

アルプス上空を通る。リヨリよ見え
てきた。雪をリをく山々。アツと思
う日もなく雲に突入。ウーニ残念。
雲から出ればめれはトウーン湖かと
思える湖。そして緑の畑や赤いトン
ガツを屋根の家等。それからは行き
と同じくりつの食事だかわからなり
倉庫をとる。アニカレツシも過ぎ日
本へ近づいてくると下は雲の海。そ
して夕白となる。どんどん暗くなり
、雲の下へと出ると雲と雲の如く肉
と真赤な夕焼け、そして富士山がシ
ルエツトで浮かんでくる。東京の灯
が赤や緑や色々な色で見えてとも
きれいだ。ゴトンゴトン、残念なが
らとうとう着いてしまった。
仕方がない。又行こう。今夜はス
イスへ行きそり。本場のマルプスを
ながめじ。

雑

感



杉山秀司

先日、中央アルプスの宝剣岳木曾
駒ヶ岳へ行つて来た。良く知られて
いるように、あそこは駒ヶ根から入
るとしらび平とリウ所迄バスが入り
、そこから一気に千畳敷カール迄口
一パウエイが運んでくる。ロープ
ウェイを降りるとそこは既に、二千
数百メートルの高度がある。そして
そこから緩急ハはゆすが一時肉をら
ずで出らぬ。さすがに三千m近リ
山であるから、すべて高山の雰囲気
である。ちようと天候にもめぐまれ
たアルプスからハ々岳、南アルプス

等々展望も非常によかつた。ロープ
ウェイを利用したおかげでコースも
のんびりとこれ、昼寝したりしながら
ら行くことができた。久しぶりに森
林限界上の山のよさを満喫したが、
帰って山行全体をふり帰ってみて何
かものたりなさを感じた。充実感が
りつもとちよつと遠うのである。そ
の原因は考えてみると、やはりロー
プウェイを利用した事によるようだ。
最近ほどの山も林道が入り込んで、
、アプローチが短くなつて来りる
が、それでもバスを降りてホツと一
息つりて定ごしらえをしておし、さ
あ出発とりう事になつた。そして展
望のきかぶり樹林帯の道を汗をふき
ふきもくもくと登つて行く。そして
それが何時向か続いた後、やつと展
望がききはじめ、山へ来たことの満
足感が物にわりて来たものである。

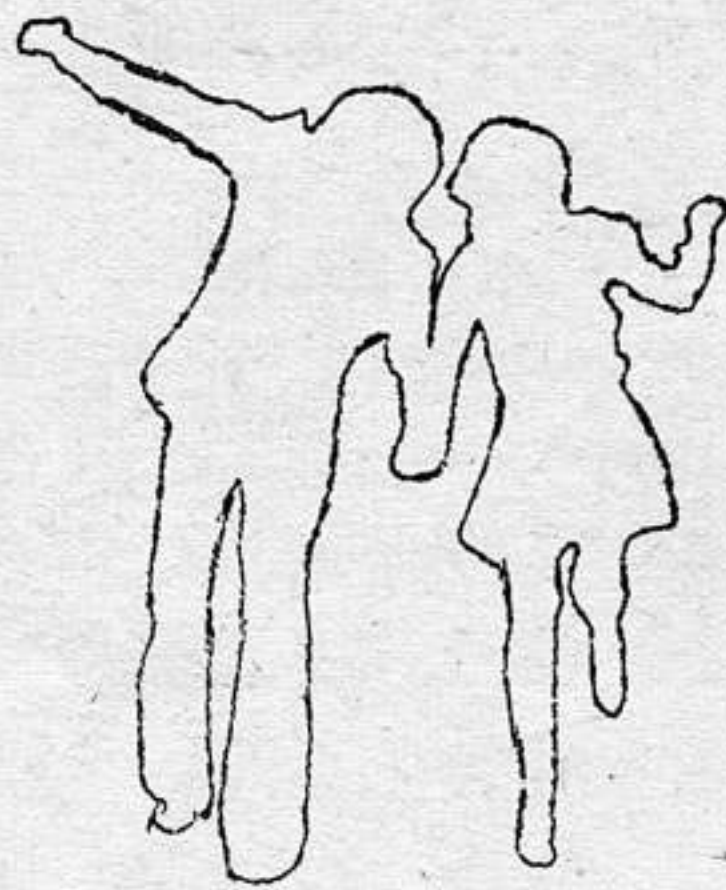
ところが今回は、ハツきよに二千数
百メートルである。今迄の経路から
、山行を交響曲にたとえるところの
めの樹林帯の登りが、ホ一泉章のよ
うなもので、三あけで、それがいさ
なりホ二泉章から降りてしまつたか
ら、何かもの足りなさを感じたのぞ
と思う。
しかし、おしかにロープウェイを
利用することにより、私々時肉の存
い者にとつてそれだけ多くのコース
を行くことができるとか、のんびり
行つてこられるという利点は否定し
がたなり。
この事で、リフガしコード音楽に
つりて或る評論家の云つてゐる事を
思い出した。それは、現在のしコー
ドに録音された演奏は飽和に演奏家
のミスは無いのぞさうである。何故
なら、初め全曲を生テープに録音し

存かつた所はリチリテープをカッ
 トしてその部分だけ演奏しをおすそ
 うである。つまり一つの曲ではある
 けれど、っぎはギテープになつてリ
 るのである。この様を現代の録音技
 術により我々の聞くレコード音楽は
 完全な演奏になつてゐるのだが、ま
 さにその故に、演奏した時の演奏者
 の心や感情の流水やもりとがりは完
 全に失われまゝつてゐる。即ちレ
 コードに録音する音楽家は、現代の
 科学技術を利用して、演奏の完璧さ
 を獲得した代わりに魂を売りぬをし
 てしまつたのだと云うのである。
 最近あちらこちらの山にレコー
 エイが出来てゐる。この様な傾向を
 自然を破壊するのではなやかと云う
 心配からにがにがしく思つてゐるが
 、それだけでなく我々観光者でなく

題を各人でいれる事を愈じた。それは
 この話の様に、我々がレコー
 エイを利用する事によりいりり
 利さや有利さを得るかも知れな
 しかしその為に向にも変えが
 大切な何かしを失うのではな
 とりう心配である。

夜の光

吉田典子



もし、私が男なら、私もやるかし
 ら、夏八月、たった一人で、30kgを

背負って、よれよれの帽子をかぶり、地図をくさん持つて、甲斐駒から光まで。

去年、八月末、女ばかり四人で甲斐駒、他丈に行きました。そして、甲斐駒の下りで、彼に会いました。川さきサツクの多りで、背負子に専田の赤い袋と一巻の荷物を背負って、よれよれの帽子をかぶり、ゆっくりと、でも、休まず歩いていました。それから、小他丈、他丈を越えて馬の背にユツテまで、先になつたり、後になつたりしながら、一日歩きまわりました。北天峠で、彼と少し、話をしました。昨日、甲斐駒に入り、これから10日向余、光まで行くつもりです。地図を見ながらの説明で、二、三、彼はまちがえました。本当に光まで行けるのかしら、私は、いささか心配になりました。その時

、光は私にとって、まだはるかに、はるかた遠い山だったからです。！でも、彼は山の頂に立ったことでした。馬の背にユツテの翌朝、甲斐駒で専田の中を黒いシルエットを浮かべ上らせている頃、彼は小屋を飛んで行きました。彼はきつと光の頂に立った事でしょう。リヤ、立ってもうぬくくて汗を流すのです。リヤ、飛べ、飛べは彼の事を「光の君」と呼んでいましたから……

もし私が男なら、私もやるだろう。夏、八月青い空の下、そつたりと、大きな荷物を背負って、地図をくさん持ち、赤い帽子をかぶり、汗をどくどくかきながら、よれよれになりながら、登り下り、下りたり、登り下り、甲斐駒から光まで……光まで……

山の
雑感



吉岡節子

※忘れかけた場所※

くつをぬらす朝つゆ

小鳥の声歌隊

髪をふきぬける朝風

やっぱりここには驚くことはなかり

真青な空、太陽のくちづけ

ここでは夢をみるひまもなく

明日がやってくる……。

※とおくても※

花をさがそう

ひまがえしたりしなりで

このままさがしてみよう。

花はあるもつとある

私のさがしてける花が

どこにもなりと

思うのはまだ早い。

花をさがそうと歩いてから

まだ何年もたつてりなり

あきらめてしまふのは

まだ早い。

小さな満足は

駭音と人間を離れて

より深く心にしみた。

小さな満足は

この河の変わりばえのしなり

荒れた道をあゆむとき程

強く知った

霜柱をさくさくと

踏んで歩る音に

今我を忘れて

聞きほれた

※無題※

この草地に

横たえてみた身は

暖かな冬の日ごしの中に

小さな満足を知った。

二人ならっぽけなみちに

大きな

枯草とススキの残りたる

この原に歩む私に

幸せと

この小さな満足を与えた。

毎日

二人な小さな感動を

知りつつ進んだ

二人ならっぽけなみちに

大きな

幸せと

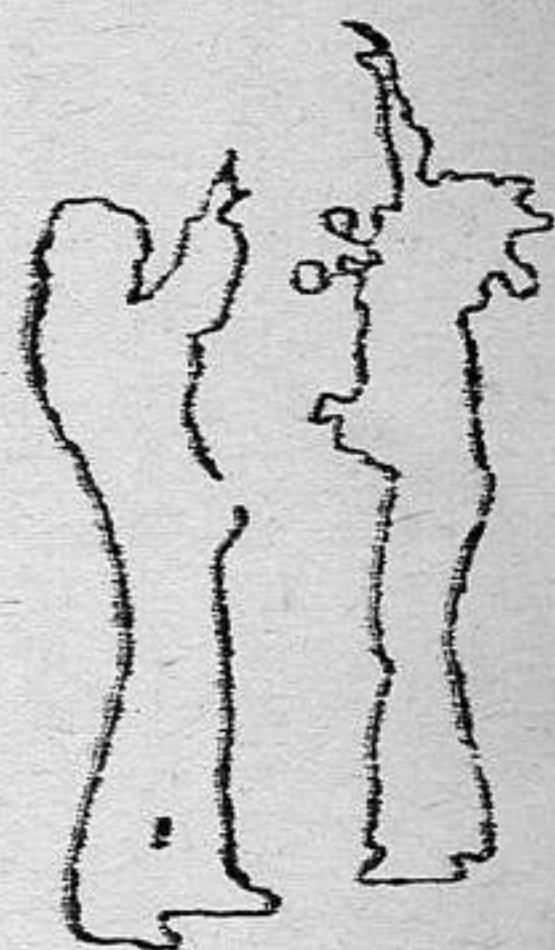
喜びを

感じた。

江の島からの富士
 富士雪を帯ぶ。さやかに雪を帯ぶ。
 冬空何ぞ高き。風威を帯ぶ湘南の怒号何ぞ壮なる。この空と二
 の海の間、玲瓏として立つ富士の秀色を見ずや。桔梗色の山膚を被
 絶頂より裾のあたりまで、銀より純白き雪は、山を包む。雪色
 浄うとは限なく、下はさながら、日光に輝き、水よりも澄める新春の空に
 し、豆相の連山を踏み、万波雪の二とく立ち騒ぐ湘南の海を俯瞰
 して、秀麗皎潔、神威十倍するを覺ゆ。
 嶽頂一点の雪、しつに富士の秀色、神采を十倍せしむるのみなら
 ず、さらに四圍の大景に眼晴を点ず。東海の景は富士によつて生
 き、富士は雪によりて生く。

登山行記

宮代信子



小さい時から野山を駆けめぐるのは好きで
した。春には「つくしとり」や「のびる」
を捜しにでかけたものです。大きくなって
でも山なんて私にはとてもと思つて日
日がたちました。山にあつたおれを控まつた
海道から九州まで、気軽に行ける旅行にせ
だして行きました。それに物足りなさを感ずる
につれて……自然に浸りたいという気持ちがあ
つて……私の山歩きがはじまりました。ごく
ごく最近のことです。さてさて「婦人の友」
でヒュッテ・アルピオという会員の山歩
屋の記事を読みそ二に泊まりたくなつて巻掛
山へ出かけました。10月9日です。沼田以北

は初めてのの上蔵線。コヘエーニれがかの有名
な土合駅。トシネルの駅ね、す二階段ねじ
と目つてゐるうちに新清水トシネルをぬける
とそ二は戦後、景色が一段と濃く感じられる
。六日町は小さな駅だ。そ二から一時間で清
水部落に着く。ヒュッテは赤い屋根の小さな
二階屋。休日を控えての小屋は30人程で一杯
だつた。今思うと、静かな一晩をゆっくり語
らつて過したかつたと思ふ。それが十分に
できる雰囲気の小屋だつたから。

私達、女の子二人はガイドブックの知識で
、尾根コースで登るつもりだつた。すると「
その道は押めなさい。バカバカしい登り一才
で、展望は良くないし、明日東京に帰るんで
しよ、時間がかかりすぎますよ。沢コースに
しなさい。でも初めてね。キケンだ。沢の
経験ないんでしよ。しよ、あつさり否定され
てしまつた。しかも泊り客は皆、今日登つて
きて明日は帰るといふ人ばかり。ガツフリし
て出る所へ横沢の山の会の男の人が、自分は

今日登ってきたのに、明日案内してくれな
いう。ホツとして、明日の晴天を祈って外へ
出ると満天の星、三等星まで見えるとか。翌
10日、6時45分、どんな道なんだろう、行き
つくだろうか。不安な気持で出発した。沢
は大きな石がゴロゴロしている。靴をぬらさ
ないように、滑るからと注意をうけ慎重に進
む。途中、どうしてもめがれなくて手をみつ
ぱってもらう。吹上の滝や天狗岩の紅葉に圧
倒されつつ二時間近く歩くと、僕はここで
戻ります。ここからは石の上の踏跡をたどっ
ていけばいいです。しという。まさかここで
放り出されるとは、又クビ沢と割引沢の分岐
とはここだったのか、へ確か分岐まで案内し
ますといつてたっけ。一心細い限りだった。
言われた通り踏跡をたどりなほも行く、沢
は曲っている為に先が見通せない。そこを曲
がればもうおしまいかばと期待すると、まだ
続いている。そんな思いを何回かくり返して
いると、道は沢から離れ急な斜面を登り出し

た。最後は短かいけれどまさしく急登。嬉
しい着いたよ!! そ二はなだらかな草原状の
稜線だった。登り出して半時間半、割引岳の
頂上に着くことができた。ここは春はスキ
のメツカとか。黄色く色づいた草原は所々に
小さな池塘があり、谷川岳や越後三山もはっ
きりと見え、とても気持が良かった。牛ヶ岳
まで往復して、帰りは井戸尾根を通った。黄
葉と紅葉、ナドカマドの色といい、本当にす
ばらしい。

こうして初めて登った山らしい山として、
巻機山は私には忘れられない山となりました。
山歩きをもっと早く始めればよかったなと
いう気持はあるけれど、自分の体力に応じた
所で、楽しみながらやっていきたいと思っ
ています。

フニング山行

横山勝利



列車を乗 越した時点から山行計画が大き
く変った。蕪崎下車の予定が日野春まで行っ
てしまった。午前四時、十一月の事では誰も
降りない。他の山に変えるか、車で蕪崎へ戻
ろうかと考えがまとまらぬいま、列車より降
りた。

上り電車一番では時間のロスが大きいと改
札を出て思案しているところどうしたんかと眠
むそうな顔で駅長さん風が出てきた。シカシ
カ、カクカクだと言った。たら芽なら蕪崎も日野
春から行くも同じだとおっしゃいましたので
す。勇気百倍、そんなじゃ又と手を上げたまで
は良かったが、乗り越し料金と言われてガッ

クリ。今日は仏滅なのだろうと考えながら駅
を離れた。

所がですよ、車が通るところか鼠一匹歩い
てない。国道17号の話しですよ。道路の脇に
水車があった。コットンコットンとやってい
るじゃありませんか。少しは気がまぎれ余裕
を取り戻すと頭上に輝やく星のきれいな事。

辺りがうっすらと明かなくなる頃に穴山駅
近くで二人の女性に会ったのです。登山者だ
ったので同類加いたと喜んで貴方も乗り越し
たのと聞いたものだ。彼女等「御座石鉞泉に
行くんですよ……いまま思うと思……事を
してかましたと心の臓が痛むのであります。
と言うのは恥ずかしい話、鳳凰に関して少々
知っていると自負していたのです。君達方向
が違ふよ。日野春から歩いてきたけど穴山橋
はこの道にならぬよと、教えてしまった。
彼女等、青山顔をして再び穴山駅まで戻った
のです。

穴山駅と穴山橋が何キロも離れている事を全然知らないので、駅はどこ、丸井のそばと言うのなら良しとしても穴山橋のそばに穴山駅があると思う私がイケナイ子なのでしょう。もう少し駅を近くに作るとか、駅のそばに川を持って行くとか駅名を変えるとか、なんらかの手法があるんじゃないかと考へる訳です。仕方なく小枯紋次郎にあやかっ、先を急いでいるもんでと彼女等と別れ、林を抜け田畑を横切り橋を渡り目指すは茅ヶ岳。佐久住還を北に進む。

農道をしばらく行くと道はある家の門前でぱったりと消えていた。失礼して裏庭から裏山へ、なおもつき進むと一本の村道へ出た。

振り返れば、甲斐駒、鋸、鳳凰が雄々しい姿でつんぞいでいる。農家で水をとらうと一筋、茅ヶ岳をめです。

大根畑の脇に抜かれたばかりの一本があり、ました。このまゝでは太陽にふぼしにされる

運命、されば夫敬と……！PCBとは無縁に近い土の香りがプーンと匂うダイコンの皮をむきポリポリパリパリ、自然に帰れのコマ、シャルジャないが、なんとも言いようがない味でした。

茅ヶ岳農場があるがなんともどこかでうらやましい。さらに進むも列島改造論の影響大でアルドリッが入って山の区画整理が行われ山林の売却済の紙には頭に来る。

おかげでその道があちこちにあるので茅ヶ岳へ向って強引につき進むもヤブこぎになってしま、かなり手ごわいのと時間もないので山頂を目の前にしなから断念しカヤトの草原で昼寝をし晩秋のすがすがしい一日を過ごした。

年も明けて一月の事、雲竜でも行って見ようと思つていたが暖冬異変の今日、ツララが落ちてアスリじゃたまらぬいと変更し雁ノ腹摺山に決めの新宿へ。最終列車二十分前だった。が座られた。二十三時五十五分の鈍行。今日

は眠るまいと必死に起きていた。大月駅、あ
と一駅だと呼意した。おかしい余りに長がす
ぎる。車窓より見れば笹子トンネルを抜けて
しまうではないか。各駅とばかり思っていた
たが初狩、笹子駅は通過だった。

さあどうしよう。どこへ行こうか、またま
た迷う。甘利山か檜形山。車窓は雪景色とい
っしか変わっている。そうだ茅ヶ岳へ行こうと
決め一案心。いつしか眠くなりユックリコッ
クリー駅ごとにハッとすると。どおにか今度は
韭崎へ降りる事ができた。何人が降りたが駅
の構内でウロケヨロ。久し振りに
冬型の気圧配置になっておりかなり冷えこん
でる。仮眠している連中を尻目に駅を出る。

朝四時、客待ちのタクシーが「バスないよ
し」と言ったので「知ってるよ」となんとなく
言ってしまった車で行こうと思っていたがやめ
て歩く気になった。前回入口を間違えていた

だけに確実に調べておいたので、ためらわず
に歩きだした。

長い車道歩きにはうんざりする。車だった
ら良かったかな。後オには町のあかりがちら
ちらまたたいて、とてもきれいだった。

闇の中に黒くせり上がっているものがある。
富士山だとわかるが本当に富士なのかと思わ
ずにはいられないほどせり上がって見えた。
月光、コウコウ、道の所々、工事甲で凍って
いて歩きにくい。

炭焼の煙がたむぐ山里に今日のパレード
が始まるのだ。紫色の富士が南ア、秩父の山
脈を従え我に朝を告げてくれた。寒風の中に
身を置き、この儀式にしばし見とれる。

カメラを出したものの、あの美しさは表現
できまいとか、まだ暗いなどと理由をつけカ
ヤの草原にツェルトを出しゴロリと横になる
と、いつしか眠りに落ち気がつく。湯はもう
上がってしまった。

朝食も早々に出発。雪が所々にある。木場より登りが急になるが落葉に埋められた道は走りが良い。野兎が二匹、目の前を駆け抜けていく。これはいい。来て良かったと一人て感心せずにはいらねえ。

茅ヶ岳山頂からの展望は口にしがたい程すばらしかったのと誰もいらない私だけのものだった。望遠鏡は鳳凰のオベリクスをとらえ、稜線をもほつきり見る事が出来る。充分に楽しんでのち金ヶ岳へ向う。

北側の斜面はクラストしてけた。雪のやわらかさうは所々を歩く。本当に気持が良い。金ヶ岳は三峰からなる。茅ヶ岳より少し高いだけあって眺望はいちだんとすばらしい。南峰まで戻る。山へ入って今日、初めての人に合う。二人連れ。ピッケルを持った完全冬山装備。アイゼン、スパッツをつけている。私とは対称的だ。二ニから観音峠に下る事とする。

さっき見つけておいた小さな赤布が見つかる

らず下りはじめて見たものの降り口がわからず再び稜線に戻り今度は石側へ降りて見たらやっと小さな赤布を見つけてきた。もっと間隔を短かくつけてくれたら良いのに探すのがたいへん。トレースは全くなく雪はみぞ上まで没する。今まで鼻歌まじりで歩いてきたが無計画なる山行故にスパッツも持っていない。北側は湯があたらず寒い。

途中より赤布がなくなり道がわからず稜線に上がって見ても木立が乱立し歩けないう。仕オなしにヤブゴジと思っただらうと思ひ、試みるもかなりきつそう。一点を基点としてあちこち動きまわる。前方はずつと岩稜、二ニは左側を大きくまくことにする。ラッセルが続く。木立の間をぬうように石へ左へ、しばらくして再び赤布を見つけた。ほっとしたのもつかの間、高度が下ったからか急な下りの細い道はガラスのようになりテカテカに凍っていた。足の置く場所は木の根のくぼみ、思わぬ時間がかかる。枝はくさっていろし始末に

おえない。岩の上を歩く時は余り滑るので恐
いくらいだった。靴の底の泥が凍ってしまっ
ていたのだ。観音峠まで行くつもりだったが
途中より赤布が小さな小径の方へついていた
のでその道を下る。小さな沢状の道は植林の
道となり、そのうちカヤやバラの林となって
行先を閉ぐ。特にバラが多く何回も引き返し
ながら前進しなければならなかった。

結果的には観音峠より下る林道に出たが、
この道の方がかなり早い。林道へ飛び出しホ
ッとする。すばらしい天候に恵ぐまれ久し振
りに歩いた気がする。一路、清川バス停へ。
かなりあるがここより見た富士のすばししか
ったこと。昼飯抜きだった。今頃になって腹
がすいてきてサンドイッチを口にしながら歩
いた。清川部落は上下に長く最初の民家より
バス停まで長かった。清川バス停よりのバス
は一日、五、六本、ここより三十分位下り宮
沢橋へ出て甲府へ降りた。

無計画が故に面白かったが人にはすすめら
れない。これで何も起こらないから良いのだ
が起こしたらなんと言われるだろう……。
山に対して日々加減な自分。再びこの様な事
をしたくないが……。

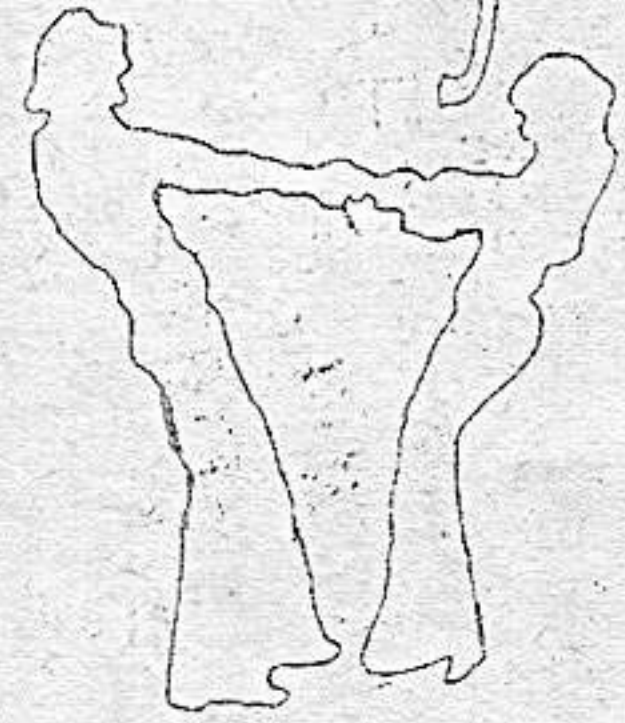
今、私に課せられる問題は確実に目的感で
起きることらしい。と言う事はパートナーに
起こしてくれぬ人がいなければならぬ。現
状はむしろかしい。私の仲間には私の気の弱いの
を知ってか私以上に良く眠るのだから……。
なんとかこの山行でハプニング山行の完結編
としたいと願っているのだが余り自信がない。
さあ、次はどこへ行こうか……。



完

山行

渡辺 巖代



九月十五日―十七日

低気圧が接近、通過の為前日より雨が強く夜行を朝立ちにかえた。台風は沖縄附近にあってこの山行にはまだ影響しそうになかったが、予定の白ガ門―巻襷山を巻襷山のピストンに変更する。清水部落に一泊して翌日未明、天気ははっきりしなかったが、出かける事にした。途中台風が近づいていけると言ってお下り山してくる人達に合った。私達も巻襷に幕営する事をあきらめて下山しました。Sさんと私はこのまま夜行で帰るのも残念なので六日町温泉で一浴する事にした。

翌朝旅館の人に、夕べは寝むれなかったでしょうと声をかけられた。ニュー入で台風は

佐渡を通過した事を知りました。

天気の良いのは判っていたが、どうしても山に登りたかったのです。山へ登れなくても私達は後悔していません。今私はあの時むとかがえもの山ぶどうをとって、砂糖と共にピストンに入れ、ぶどう酒の出来るのを楽しみに待っているのです。

十日八日

飛び石連休なのに忙しくてどこにも行けな。夜しかあいていよいよ山に行きた。思いついたのは前々より新聞等にぎわっていたジャコビニ流星群であった。さっそくいつも忙いSさんに電話する。夜ならあいていますと言うので流星群にかこつけて山に行く事になった。

見える、見えな。議論が学者の中にもあったが、とに角山を歩く理由が見つかって喜んで出かける。日曜の夜なのに寝毛行のバスにも同じ目的の登山者がかなりいた。

ヤビツ峠に近くなるとガスはますます濃くなり、三の塔の予定をあきらめてヤビツ山荘に入る。午後十時。朝帰りの予定なので二時まで仮眠する事にしたがいつしか深くねむってしまつたらしく、目がさめた時は四時三十分を廻つていた。さめぬ目をこすりこすりヤビツから大森野へ下る。途中やつと車がひろえたが息せききつて会社にかけてたかいもなくタイムカードは9・04分の遅刻になつてしまつた。

五十八日と数時間前に通過してしまつた幻の流星群はその影すら見え、その日一日、あくびをかみころして仕事にはげんだのでした。それでも山を歩きたいのです。



阿部早苗

立山

雪上の
晚餐

テントが見えた。風よけのための
 厳しい氷雪のブロックに半分を囲まれ
 てゐる我々のテントが見えてきた。
 白銀の世界にある黄色いテントは、
 大分傾いてゐる太陽に照らされると
 一層鮮やかに目に映り、今日一日の
 行動がなぜかなつかしく思い出され
 る。

昨日、二二室堂に幕営のときには
 吹雪であつたが、夜には満天の星と
 なり、遙か富山方面も明るく見えた。
 として歯はガタガタと鳴り、身は
 ブルブルと震えてほとんど眠ること

ができなかつた一夜も明け、今日の好天を迎えることができた。ベースキャンプを七時前に出発。一の越から雄山、大汝山、真砂岳、それに別山と三〇〇メートルの立山を縦走する。久しぶりにつけたアイゼンの氷上にピシツときまる感觸、別山からの剣岳の巖容が、今なおはつきりと目に浮かぶ。そして剣御前小屋から稜線を外れてスキーヤーの世界に入ると、影のコーチとばかりスキースクールの生徒への批評も忘れず、時々足を止めては勝手なことを言っていた。風が冷かつた稜線に比べ、スキーのできる雪鳥沢側の斜面は穏やかであった。全てが数時間の出来事とは思えぬ程の充実感。そんな回想にふけっていらら、もう我々のテントに着いてしまっていた。そしてこの日を、この

山行をさらに素晴らしくしたものは「夕食」であった。雪山のテント生活では、いつもながら皆中を丸めてバーナーで暖をとる。日の美しさに誰れかの「雪上の晩餐」といこうか？」に意見一致。食事の仕度はリーダーに任せて、早速食卓の用意が始まった。まず、テーブルと椅子は、風よけに使つた氷のブロックを積み重ねる。そしてテーブルには太いキャンドルを二本燈し、椅子には自参の毛皮へ尻皮を敷き、準備OK。背景の方もまた抜群であった。立山も奥大日岳も、所々のブロックに囲まれたテントも、皆オレンジ色に染まっている。雪と氷の白い世界に居ることを忘れる暖かい色であった。そろそろ出来上るお雑煮の臭いにお

腹の虫が泣く頃、メンバー全員が食卓についた。四人のうち二人は落日を正面にし、二人は夕日を背に受けて、マカロニウエスタン調のムードに浸る。まずは立山縦走と、今日の好天を祝し、ビールで乾杯！楽しい食事のスタートである。熱いお雑煮の入った食器を持つ左手は良いのだが、寒気の左め凍ってしまいそうだが、右手には手袋をはめてハシを持った。テーブルが夕日できらきらして眩しい。その上に温かい食器を置いたら傾いているオヘスルスル滑りはじめ、あわてて押えた。苦笑った。そんなテーブルも、少しくらぐらする椅子も、雪上の夕食には「自然」と言うか何かふさわしいものがあつた。立山のことを始めとして話に花が咲き、お雑煮がおいしくてお鍋を空に

し、そして笑いは絶えることがなかつた。寒さを忘れてしまふ程、私の心は「雪上の晩餐」に酔っていた。

今まで雪山の楽しみの一つとしてテント内の食事の時間があつた。その時の心身共にリラックスできる一種の安堵感が、雪山に対する「寒い、冷たい、レ」というイメージに暖かさのアラスとしていた。そして寒中にもかかわらず雪と氷の上で食事をするほど想像もしていなかつたが、今山行で従来のパターンが破られた。好天に恵まれたこと、仲間の閃き、背景の良さもあつたらうが、こんな素晴らしい夕食の「時」を過せたこと、何か新鮮な発見でもしたように山に対して新鮮な感覚が蘇ってきた。五月の立山、雪上での、我々四人の晩餐に感謝！！

雪という氷という山という自然の中に、このまますっぽりと包まれて居たいと思つていても、やはり五月の三〇〇メートルの寒さには絶え切れなかつた。陽が落ち、闇が迫つてくる頃、回りのテントの赤い灯に誘われてか、我々もキャンドルを消し、テントに入った。

雪山の良さを満喫した一日も、テントの中でバイオレットファイズを空けてシユラフにもぐることになつた。

明日は下山。弥陀ヶ原から富山へと出る。澄んだ空に散りばめられた星に輝いて、白い氷の椅子とテーブルが青白く光っていた。

——四七年五月——



鈴木国え



裏大雪の石狩岳に臨接した、ニペツツ山、は北の山の中でもアルペシ的風貌が、日高の山々と共に道産子の法人の間でもあこがれの的の山である。愛称「ニペツ」というかわい名前と姿を知つたのは、大雪連峰縦走途中のトムラウシに登つた時、石狩山稜の中でみるときわ抜きんでていた姿を見たのが初めてである。逆光線で山々は黒々としていて、真白い雲海が谷間を埋めつくしていた。まったく運のよい対面だったと思う。

空から見る苦小牧はネオンや外灯車のヘッドランプの明りが点滅、移動して美しい。工業地帯であるから終夜操業してゐる工場もあるのだらう。昼間なら恵庭岳や支笏湖も俯瞰出来たろうに、今はただ灯だけが地上での表情でしかない。海岸線沿いの灯の美しい町を過ぎると、暗闇の中を行くだけになった。

東京の町なかの様なビル街をぬけると札幌駅に着く。駅は混雑してゐて、これも新宿や上野の様な雑沓。違ふのはそのほとんどの人がリックや旅行カバンを持ってゐる若い人。しがし上野のようなへんな野暮たさが無いのが救われる。

その日の札幌発最終列車だ

った。いつもとの違いは東京の場合、いつまでもネオンの灯が仲間断切れないのに、こゝはものゝ数分も走ると、まったくの暗闇になる事だ。その暗闇がありがたい。

帯広から十勝三岐線に乗って約二時間、終着駅十勝三岐で下りる。終着駅と言うのにふさわしい駅舎と2、3軒の売店、営林署の建物。もっぱらとも売店というよりも何んでも日用品の売ってゐる。例の「田舎板入りパーマーケット」でも言った才がわかりがいい。そのスーパーでトラック便の交渉をしてゐると、帯広の駅で見かけた30才も中ばだろうか、ヒゲづらでいかにも「北の山」の山男たる雛形の様な人が、やはり杉ノ沢へ入りたいと言ってきた。店主と2人だけの団体交渉で商談が成せし